

将軍家を祀った東照宮と圓流寺

山根克彦

1. 圓流寺の創立

天台宗照高山圓流寺（松江市西尾町）は、堀尾吉晴の孫忠晴が寛永5年（1628）に西尾の地に、東照宮の別当寺として建て、祀ったものである。その後、寛永15年に信濃国松本より出雲に移封された松平直政が、明暦元年（1655）に大猷院殿（3代将軍徳川家光）の靈廟を建立している。そして寛文3年（1663）家光の13回忌に鐘楼を造営し、殿堂伽藍が整えられる。

2. 歴代将軍家の靈廟圓流寺

圓流寺は3代将軍徳川家光の靈廟が造られてから、これより後は寛永寺に葬られた将軍は、この圓流寺に祀られることになり、増上寺に葬られる将軍は寺町の誓願寺に祀られるようになった。

圓流寺の歴代将軍の位牌

	院号	補任	没年	
3代徳川家光	大猷院殿	元和9年7月(1623)	慶安4年(1651)	48歳
4代家綱	嚴有院殿	慶安4年8月(1651)	延宝8年(1680)	40歳
5代綱吉	常憲院殿	延宝8年8月(1680)	宝永6年(1709)	64歳
8代吉宗	有徳院殿	享保元年8月(1716)	宝暦元年(1751)	68歳
10代家治	凌明院殿	宝暦10年9月(1760)	天明6年(1786)	50歳
11代家斉	文恭院殿	天明7年4月(1787)	天保12年(1841)	69歳
13代家定	温恭院殿	嘉永6年11月(1852)	安政5年(1858)	35歳

天台宗東叡山寛永寺は、家光が創建した将軍家の祈祷寺であって、真言宗三縁山増上寺は、徳川家康によって徳川家の菩提寺となっていた。以後増上寺は、浄土宗の総本山として高い寺格を誇っていた。徳川家康は、東照大権現として日光山東照宮に祀られている。

3代家光は本来なれば、家康が徳川家の菩提寺と定めた芝増上寺に埋葬されるべきであったが、自ら開創した寛永寺に葬儀を依頼していたとされる。そして家光は最も敬慕していた家康の眠る東照宮に埋葬されることを望んでいたことから、祈祷寺であった寛永寺も菩提寺となり、寛永期以来の江戸二大寺間のバランスは大きく崩れ、寛永寺が将軍家菩提寺として大きな勢力を持つこととなる。

こうした寛永寺・増上寺の両寺の菩提寺としての勢力争いの結果、両寺のバランスを取るような形で、五代綱吉以降の将軍は、十四代家茂まで寛永寺と増上寺に祀られる将軍は四人ずつとなっている。松江藩もこれに従って、圓流寺、誓願寺に分けて各将軍が祀られていた。

3. 浄土宗本縁山誓願寺

寺町にある誓願寺は、元広瀬町富田にあり、堀尾氏の香華寺であったという。慶長13年（1608）

松江開府と共に伝承上人によってこの地に移転したといわれる。堂宇をはじめ建物楼門に至まで堀尾吉晴によって建立されたもので、当時その華麗さは、人目を驚かす程のものであったという。

松平直政は、2代将軍秀忠の霊廟を祀らせ、200石を与え出雲国の諸寺の上席としたという。

元禄元年（1688）に火災により総てを焼失し、翌2年に再び諸堂宇が再建されている。4代藩主吉透が再建した楼門は、小林如泥の祖父が棟梁として建築したと伝わり、昭和2年（1927）に修理が不可能となり取り壊されてしまった。

増上寺に葬られている各将軍の霊位は、当寺に誓願寺に祀られていたであろうが、現在将軍家の位牌は2代秀忠、9代家重、14代家茂の3基しか残されていない。

誓願寺現有位牌（●印は所在）

	院号	補任	没年	
●	2代 徳川秀忠大徳院殿	慶長10年 4月(1605)	寛永 9年(1632)	54歳
	6代 家宣文昭院殿	宝永 6年 5月(1709)	正徳 2年(1712)	51歳
	7代 家継有章院殿	正徳 3年 4月(1712)	享保元年(1716)	8歳
●	9代 家重淳信院殿	延享 2年11月(1745)	宝歴11年(1761)	51歳
	12代 家慶慎徳院殿	天保 8年 9月(1837)	嘉永 6年(1853)	61歳
●	14代 家茂昭徳院殿	安政 5年12月(1857)	慶応 2年(1866)	21歳

残っている3基の位牌は、円流寺と同形で観音開きに金箔を施した厨子に入れられ、雲形の位牌も豪華な作りである。そして当寺の檀家に松江藩の家老であった三谷家の菩提寺となっている。又、本堂には、松平治郷公親筆による山号本縁山と書かれた掛け軸がある。

4. 圓流寺の変遷

当寺は東照宮の別当寺として本尊不動明王を安置し殿堂伽藍が立ち並び、開創当初は1000石を与えられ、天台宗として平田の鰐淵寺、安来の清水寺と並んで寺格の高い寺院であった。住職の格式も高く家老向座であり、住職は代々鰐淵寺より派遣された僧であった。

境内の建造物は、御霊殿、通殿、拝殿、唐御門（伝如泥作）鐘楼、四脚門等があり、下段にも荘重な本堂（瓦葺）庫裏があった。当時の本堂は、上の間、次の間、三の間、四の間、対面所、使者の間、書院、茶の間等がある豪壮な建物であったという。当時前の川は禁漁区であって、坂下の道路（現在の県道）は、一般人の自由通行は禁止されていたと伝えられる。

威勢を誇っていた圓流寺は、江戸幕府の崩壊と共に松江藩も廃藩置県となって、藩の支援を失い崩壊の道を迎えることになる。第二十世の伽羅陀覚湛住職在任中に廃藩となり、寺領も給せられなかったため近郷の子弟を集めて寺子屋を開き収入の足しにしていたが、こんなことでは寺の維持が出来ず、広い本堂を売却してしまう。二十一世の村田寂順は、在職数年であったが元治元年（1864）鰐淵寺の松本坊住持となっていたが、明治元年（1868）の廃仏毀釈運動が起こり、天台宗本山の比叡山延暦寺にも危機が迫り、その回避運動を起こし成功させた僧であって、後明治29年（1896）天台座主、京都妙法院座主にもなっている名僧であった。

二十二世貴志寂忍師の時に益々維持困難となり倉庫を売却し、庫裏を取り壊しその材料で本堂跡に庫裏を長さ五間横三間半に縮小して再建している。二十三世林寂応師も1年ばかりで他へ転じた

ので、その後は無住となり山内は一層荒廃し、本堂及び庫裏の跡地は西尾地区の共有となる。

地区民遺跡地に桜、桃、楓等を植え公園探芳園を開設し来遊者が多くあったという。しかしその後太平洋戦争となり、鐘楼の鐘は供出され、敗戦後は公園も開墾され畑地となった。昭和27年(1952)には鐘楼も解体して売却されたので、境内の荘厳さは失われてしまった。

昭和40年(1965)には、東照宮、圓流寺は松江市立女子高等学校建設により、総ての古い建物は、解体され、汝泥作と伝わる御成門は月照寺へ移転し、御霊殿(尊牌殿)、四脚門等は解体されて西津田の山荘安来家に移設されている。

5. 東照宮の変遷

堀尾忠晴によって建立された東照宮は、圓流寺の境内にあり、その後松平直政によって更に社殿を造営し、山上の大鳥居は慶安2年(1649)の直政の寄進であった。祭日は毎年4月17日で、藩主は参勤交代があり在国の隔年には必ず参拝したという。松江城下から、十二丁櫓の船で参り、お供は家老、御添え役、寺社奉行等々が随行した。西尾の舟入りにはいると直ちに上陸し、坂下の茶屋で休息であった。波止場に建てられた鳥居と二基の灯籠は、嘉永6年(1853)10代藩主定安の寄進によるものである。

明治維新により廃藩後、東照宮の祭祀は西尾の紐解神社の宮司吉岡氏が当たっていた。そして明治31年(1898)に直政を祀る楽山神社に神霊を合祀し、さらに翌32年(1899)本殿を城山二の丸に移遷して松江神社として建立している。松江神社の社殿前の大鳥居や手水舎はその時に移転されたものである。その他に定安公寄進の灯籠2基も移されている。また、現在一畑ホテルの庭園にある大灯籠は対であったと言われ、その内の1基であり火袋には8弁の菊花紋様が彫られている。

東照宮は圓流寺の北側にあったといわれ、現在松江市立女子高校の校門に入って右側に、東照宮遺蹟の石碑が立っている。

6. 売却、移設された東照宮と圓流寺の建造物

東照宮

[本殿] 明治32年(1899) 松江神社へ移築。

[手水舎] 明治32年松江神社へ移築。大工棟梁渡辺加兵衛好真作。

[大鳥居] 明治32年松江神社へ移築。慶安2年(1649) 直政公寄進。

[二の鳥居] 西尾町紐解神社へ移設。[灯籠] 松江神社へ移設。

[大灯籠] 一対の内一基一畑ホテルへ移築。他の一基不明。

圓流寺

[本堂] 20世覺湛の代に売却。

[倉庫] 22世寂忍の代に倉庫売却。

[庫裏] 庫裏を解体5間×3間5半に縮小し再建。

[鐘楼] 鐘太平洋戦争中に供出、昭和27年(1952)に解体し売却。

[拝殿] 2間半×5間唐破風の向拝。昭和21年(1946) 仁多郡奥出雲町三成、臨濟宗善勝寺へ

売却され本堂となっている。解体された用材は、松江駅まで馬車で運搬し、松江駅より木次線で貨車により輸送する。

[御霊殿 (尊牌殿)] 昭和 40 年 (1965) 松江女子高校建設により、西津田山荘安来家へ移築。

[通殿] 西津田山荘安来家へ移築。

[四脚山門] 西津田山荘安来家へ移築。

[四脚唐門] 西津田山荘安来家へ移築。

[御成門] 唐御門月照寺 (小林如泥作と伝わる) へ移築。

7. 圓流寺の仏像等について

圓流寺堂宇内に、歴代将軍家の大位牌と共に仏像等の寺宝が保管されている。その内仏像等の調査を平成 20 年 (2008) 5 月に、島根県立古代出雲歴史博物館の主任学芸員の椋木賢治氏に依頼した。以下、調査成果を紹介する。(椋木賢治氏作成の報告)

[不動明王立像]

木像、彩色、玉眼、江戸時代、像高 55 cm、台座～光背高 90 cm、台座幅 33 cm

右手に宝剣、左手に羂索を持ち、やや腰を右にひねって立つ不動明王像。右手は腰の辺りに、左手は胸の高さに構える。表情は忿怒の相を見せる。両眼を見開き、両牙とも下方に向く。両口角をかるく上げる。上半身には条帛を着け、下半身には裙と腰布を着ける。瓔珞、腕釧は銅製、肉付きや腰の捻り、衣文による動きの表出は減り張りが効いており、そつのない造形は好感がもてる。

火炎光背は尊像に覆いかぶさるように立体的に造られている。

[宝冠阿弥陀如来座像]

木像、彩色 (後補)、彫眼、平安時代後期、像高 69 cm、髪際高 56.6 cm、膝張り 55.4 cm

宝冠を戴き、両手で法界定印を結び、右脚を上結果跏趺坐する宝冠阿弥陀如来像。構造は頭部を一材から彫り出し、膝に横一材を矧ぎ、両肩先を別材とするようである。(彩色のため詳細不明) 体部のみ内削りを施している。像低は削られておらず、内削りは背面から施されているものと思われる (背面は未確認)。

彫眼、耳耳朶環状、三道を刻む、白毫木製、彩色は後補。

後補の彩色により構造や表現が判然としないものの、浅く整った穏やかな衣文などから平安時代後期の作風を伝えるものと見られる。本来、美しい彫像であろう。

[男神坐像]

木像、彩色 (後補)、彫眼、室町時代、像高 26.5 cm

口を開けて歯を見せる異形の神像。両足裏を合わせて座す。天台宗で常行三昧堂の守護神とされる摩多羅神と見られる。通常、頭部に唐制の幞頭をつけ和様の狩衣を着け、鼓を打つ姿に表わされる。本像の場合、冠上部欠失、手先、持物欠失により像主は定かではないが、異形の相貌を表わす表現は巧みで見るとべきものがある。

[地藏菩薩坐像]

木像 彩色 (後補)、彫眼、室町時代、像高 27.8 cm

左脚を踏み下げて岩座に坐す地藏菩薩像。頭部側面部欠失。両手先欠失。

[伝教大師坐像]

木像、彩色、玉眼、室町時代、像高 33.6 cm

頭巾を被り禪定印を結んで坐す僧形像。伝教大師最澄の像と見られる。

[薬師三尊懸仏]

銅製、室町～江戸時代、径 65.5 cm、薬師像高 13.4 cm、板厚 6.4 cm

木胎を銅板で覆った基板に、別鑄の薬師如来坐像、日光・月光の両脇侍菩薩立像、台座、花瓶などを取り付ける。獅嚙は木像彩色。

薬師三尊の衣文の表現から室町～江戸時代の制作と思われる。

[鷹図]

紙本金地着色・扁額・江戸時代、本紙 縦 105.4 cm、横 92.6 cm

松樹に留まる一羽の鷹を描く。落款・印章がなく作者については不明。江戸時代前期に活躍した松江藩御用絵師狩野永雲（1697年没）の作風に近い。

※当鷹図の扁額の作者は、松江藩御用絵師狩野永雲筆と伝わり、『あさくみ郷土史考』でも狩野永雲としている。

8. おわりに

圓流寺は昭和 40 年（1965）の松江市立女子高等学校建設により、全ての建物は解体されてしまった。その後鉄筋コンクリートの小堂宇が松江市立女子高等学校下に建立され、堂宇内に歴代将軍の位牌や仏像などが僅かに保管されている。当圓流寺は、現在檀家は無く西尾町内の 3 軒の町民の方により維持管理されている。そして鉄筋コンクリートの小堂宇は老朽化し、雨漏りがして中央部の天井は落ち破損している。また、コンクリートの堂宇は温度、湿度の管理が全くなされていないために、室内に保存されている貴重な文化財である位牌や仏像等損傷が激しく損壊の危機的な状態にある。

現在圓流寺護持のメンバーは実質 2 軒であって、しかも高齢となられており、堂宇と貴重な文化財の保存管理は到底無理であり保存対策が急がれる。しかし幸いなことに当圓流寺の境内にあった建物が、移築当時のままに松江市内の山荘に位牌堂、通殿、四脚門、山門が現在不使用の状態であり、これらの諸堂と合わせて保存活用ができればと考える。

（参考資料）『あさくみ郷土史考』1956.2.18、『もうひとつの徳川物語・徳川家霊廟の謎』誠文堂報光社 1983.11.12、『島根県史 8 巻』、『朝酌郷土誌』、『松江市誌』、『島根評論』第 9 巻下 1932.12.1、『心の散歩道』白濁の今昔を訪ねる 1993.3

（やまね かつひこ 松江市立生馬公民館長）

